
A blue rose and fl@me

録

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A b l u e r o s e a n d f l @ m e

【Nコード】

N 0 0 7 2 T

【作者名】

録

【あらすじ】

現代高校生の歩識美はふとしたきっかけで気を失ってしまふ。気付けばベッドの上で全裸、隣には知らない男。「お母さん私お嫁に行けなくなりました」と嘆く暇無く、この場が魔界だと知る始末。しかも自分の異常体質が明らかに……。魔界のおかしな住人達に巻き込まれながら己の謎と運命に立ち向かう羽目になった女子高生生の多分ファンタジーな物語。

人物紹介

登場人物

* 高瀬 タカセ 歩識美 フシキミ

人間、17歳、黒髪黒眼、”明るくめげないへこたれない”がモットーの高校二年生

天性のツツコミ、スタイルは無駄に良いが運は絶望するほど悪い

* ギルディア・焰 ホムラ・シユタイン

魔族、28歳前後、緑髪（生え際のみ赤）黄眼、頭のネジがすっ飛んだ性格の俺様博士

DSの塊、何でもかんでも解剖・改造をしたがる、メス常備

* 継 ツギ

改造魔族、15歳前後、金髪銀眼、常に食欲旺盛な残念美少女
マイペース、食べる事・面白い事を探すのが好き、シャベル常備

* 剥 ハキ

改造魔族、17歳前後、黒髪緑眼、ローテンション帝王な青年
冷静沈着、ツギの歯止め・お守役、鶴嘴 ツルはし常備

人物紹介（後書き）

とりあえずメイン4人です。
また増えたら追加していきます。

1、ツッコミ過ぎは死の薫り？

『 歩識美^{フシキミ} ”だつてえ……変な名前ー。』

幼稚園の時、同じ組の子に名前をからかわれた。

『 名前も変だけど、ちょっと雰囲気も変つていつか……』

小学生の時、同級生の子にそう言われた。

『 ”不気味^{フキミ} ” って名前の方がしっくりくるんじゃない？アハハッ。』

中学生の時、隣のクラスの嫌な女に勝手に名付けられた。

小さい頃から確かに気になって自分の名前。

幾ら両親に聞いてもその由来は教えてはもらえなかった。

でもまさか、この名前の意味が後々自分の運命を狂わし謎を生み出すことになるうとは、

名前をからかった子に、同級生の子に、隣のクラスの嫌な女に、

ぐっの音も出なくなるほどの恐怖を叩きこんでいた歩識美には想像する余地もなかった。

数年後、とある女子高から物語は始まる。

夕方、一日の授業を終え帰宅する生徒が廊下を行き交っていた。そんな生徒達同様、一人の少女も帰宅しようとして下駄箱へと向かう。しかしそれは彼女を呼び止める声によって一時停止された。

「歩識美ーっ！待ってよおー！」

「んー？・・・なに、鶯ツグミ？」

呼び止められた少女・歩識美は後ろから慌ただしく追いかけてくる友人にゆるりと振り向いた。

歩識美に鶯と呼ばれた少女はバタバタと駆けて来て、

歩識美の前で急停止したと同時にキッと彼女を睨みつける。

「歩識美、酷いよ！今日は一緒に帰ろうって言ってたでしょ?!なに先に帰ろうとしてんのよ！」

「え、そうだったっけ？ごめんごめん、本気で忘れてた。」

歩識美は素直に謝るが、鶯は可愛らしい顔をしかめプクッと頬を膨らませた。

それでも可愛い顔に変わらないのは美少女の特権だと、歩識美は勝手に思う。

「うう〜・・・バイト無い日は一緒に帰るって決めてたでしょうが！」

「ごめんってば・・・てか、鶯今日バイト無かったんだね。」

「うん。・・・と、言う訳で、一緒に帰りましょう！」

怒り顔から一変、くるりと輝かしいほどの笑顔になった鶯を見て、歩識美は苦笑しつつも彼女の言葉に頷いた。

他愛もないことを話しながら二人は下駄箱へ辿り着く。

「それにしてもさ、歩識美はすぐ単独行動するから心配だよ。」

「へ？なんでよ？私なにか心配かけるようなことしてる？」

歩識美がそう言うと鶯は真顔になり意味深に頷く。

「存在そのものが心配です。」

「存在が?!?!」

鶯の言葉に愕然とする歩識美を見て、鶯は堪え切れず笑い声をもらした。

「ぷっ……ごめっ、”存在”は言い過ぎたかなあ……でも強ち嘘じゃあないんだよね。」

「?それってどう言う」

”意味?”と言葉を続けようとした歩識美の声を、

彼女が開けた靴箱の中にあつた大量の何かが落ちる音がかき消す。

「……………」

「……………ほら、ね?」

毎度のことながら呆然としてしまう歩識美の隣で、

鶉はため息をつきながら靴箱から落ちて来た物を見つめた。

歩識美の足下及び靴箱内には大量の紙……否、大量の手紙が溢れかえっている。

ここで説明するのも野暮というものだが、言わずもがな大量の手紙とは大量のラブレターのことである。

更に説明するのもなんだが、ここは女子高であつて男性教員はいるが男子生徒は一人もない。

更に更に説明するのはアレだが、

歩識美は間違いなく正真正銘の女の子であつても説明すな!逆に怪しいわ!」

歩識美はビシッと裏手ツツコミを繰り出した。

「歩識美、誰にツツコミいれてるの?」

鶉の冷静な言葉に歩識美は我に返る。

「はっ！・・・私としたことが・・・なんか急にイラッしたから
つい・・・」

「カルシウム不足？・・・まあ、とりあえずこれ拾おっか。」

それにしても、毎度毎度凄いやねえ・・・モテモテだね、歩識
美！」

「そうかなあ、ちよつと度が凄過ぎて逆に実感が湧かないんだけど・・・」

落ちている手紙を一通拾い、それを見つめながら歩識美は短いため
息をつく。

隣では鶉がバツサバツサと袋に手紙を詰めていて、彼女の動作は慣
れたものだった。

それほど毎回恒例行事なつてしまっているのである。

手紙の全てを拾い上げた鶉は複雑な顔をする歩識美を見上げる。

「でもさ、同性だけじゃなくて異性にもモテモテなんだからいいん
じゃない？」

”ほら！”と鶉が示した先・校門付近を見て、歩識美は更に複雑な
顔を作り上げた。

これから二人が帰るために通らなければいけない校門の外は、
他校の男子生徒達で先が見えなくなっている。

歩識美は顔に青筋を立てながら引き攣った笑みを浮かべた。

「いやいやいや・・・あれは私とは関係ないでしょ、だって他にも可愛い子沢山いるじゃない!」;

「えー、だってみんな頭にハチマキつけてるよ。」 LOVE HU
SHIMI” っていう文字が

「ぎゃああああああああ、なにその羞恥プレイいいいい! /
/ / ;」

「あ、待ってよ、歩識美ーっ!」

大量の手紙を抱えた鶴をその場に残し、余りの恥ずかしさに歩識美は学校の裏門・・・

ではなく、垣根を突き破って校外へ飛び出した。

「ぜえぜえ・・・」; 「ここまで誰も追ってこないでしょ・・・」
「」

荒い息を吐き出しながら歩識美は辺りを注意深く見渡し、

誰もいないのを確認して近くにあったベンチへと座り込む。

ここは学校の近くにある小さな公園。

ちよっとした遊具とベンチと、あとは歩識美達が住む町が見渡せる

小高い丘があるだけだ。

町と共に綺麗な夕日が視界に飛び込んでくる。

歩識美はぼうつとその光景を眺めた。

色白の頬が夕焼けに染められ、肩まで伸びた艶やかな黒髪がふわりと風になびく。

髪と同じ黒い瞳は大きく、長い睫毛は頬に影を作る。

鶯が可愛いといわれる美少女ならば、歩識美は透き通るような美しさをもつ美人だった。

ただ、外見と性格が全く伴わ「しつこいんじゃない、己は！」

自分一人、誰もいない公園で再びツツコミを入れ、歩識美はまた我に返り深く落ち込む。

歩識美は時々無性にツツコミを入れたくなることがあるらしく、常々自分はおかしいのではないかと思っていた。

「・・・私、俗に言う”電波”なのかな・・・いや、いやいやいや！」

暗くなりかけた思考を歩識美は無理矢理頭を振って吹き飛ばす。

そしてベンチから離れ、丘の柵をガシツと掴みながら夕日に向かって強く拳を突き出した。

「ちょっと独り言が激しいだけ！そうよ、独り言よ！」

納得したように一人頷く歩識美。

独り言が激しいのも如何なも「うっさいわボケえええええあああああああああ？！..」

自己完結した直後に理不尽な物言いをされかけ、歩識美は三度目のエア―裏手ツッコミを繰り返した。

その際、少し力を込め過ぎていたのだろう。

掴んでいた柵が根元からぼきいっと良い音を立てながら圧し折れた。歩識美は重力に逆らう事無く、そのまま丘の下へと吸い込まれるように落っこちる。

ちなみに丘の下はちょっとした崖になっているので落ちれば怪我どころか死に直結しかねない。

と、言うか既に落ちていたので、

確実に死に近付いていることは間違いない「冷静に解析すなああああああああ！」

その後、歩識美の悲鳴含めのツッコミは激突音と骨の碎ける音と共に消えた。

真っ黒な大地。ただただ広がるそれは荒れ果て、

わずかに生えた草木はカラカラに乾ききっている。

そんな荒野を黒い影が縦横無尽に走り回っていた。

影の通った後には何かを引き摺って出来た細長い線が残っている。引き摺っている物は荒れた大地と接触するたびに金属音を響かせていた。

ふと影がぴたりとその場に立ち止まる。カッンと手にぶら下げたそれが鳴く。

黒い影・・・に見えたのはその人物が羽織っている黒いローブで、ローブの隙間から眩い金の髪が一房零れ落ちた。

ローブの人物はくんくんと鼻を鳴らし、辺りの匂いを嗅ぎながらふらふらと歩む。

そして少し大地が窪んで穴のようになってい場所へ着いた。

穴の中を覗き込んだローブの人物はある一点を凝視する。

そしてローブから微かに覗いた桜の花弁のような唇を血のように紅い舌で舐め上げた。

「・・・首、折れてるよ・・・・・・食べていいのかなあ？」

そう呟いた唇は美しい三日月を模り、その唇の隙間から垣間見えた犬歯は鈍い光を放っていた。

1、ツッコミ過ぎは死の薫り？（後書き）

ちよっとだけ日常編です。

歩識美は容姿がアレな分、残念な性格です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0072t/>

A blue rose and fl@me

2011年10月9日01時41分発行